

# ほなひ歴史通信

第60号  
2011.9.1

## 天狗党も諸生党も通った大子

天狗諸生の争いの遠因は藩の継嗣問題だが、幕末の尊皇・佐幕の対立や、外国船の来航による攘夷・開国の意見の対立等が絡み合った複雑な国内情勢に起因している。弱体化した幕府は外国の力に対抗出来ず開国し、攘夷鎖港を唱える勢力を押さええることも国論を統一する力もなかった。そのため両勢力の対立は激しくなり、各藩でも藩内の抗争が起こった。

水戸藩では天狗・諸生の対立となった。天狗党は幕府の開国の方針が朝廷の意志に反し、異国の圧力に屈している状態を批判し、攘夷鎖港を唱えて幕府に迫る立場である。これに反し、諸生派は幕府の方針を受け入れる事で藩の安泰を図る方針である。双方に慎重派と過激派があり、対立は激しくなった。水戸藩ではその上に、戊午の密勅、斉昭や藩主義篤の塾居・謹慎などの事件が加わり、藩内は大きく揺れ動いた。

攘夷鎖港を唱える一味が筑波山に寄り幕府に反旗を翻した。幕府はこれに討手を差し向け、天狗党の乱が始まる。

天狗党は筑波、下妻、湊、磯濱等で、幕府軍や諸生派と戦って、大子に至った。不利な戦いを続けるよりは、京へ上り一橋慶喜に心情を訴えようとして、ここで組織を整え左貫を通り、

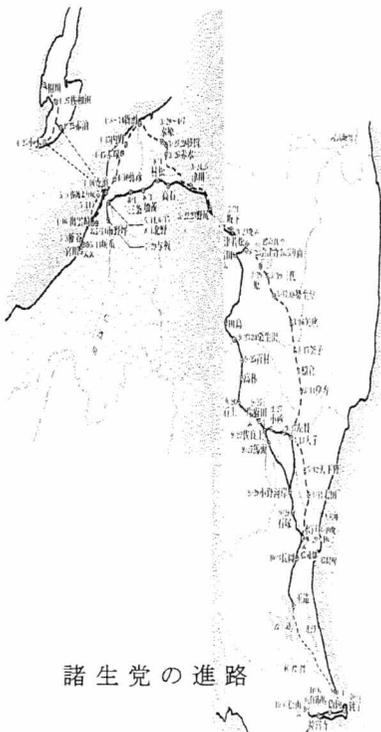
黒羽、伊王野と、或いはある時は歓待を受け、極寒の北陸を野営を重ね越前に至った。ここで遂に降伏し厳しい断罪を受けた。藩内に残っていた天狗党も処刑された者が多く、天狗党の勢力は衰え世は諸生党の時代となった。

やがて幕府が崩壊し天狗党が復権すると、諸生党は報復を受ける様になり、水戸を離れ大子を通り会津へ逃れた者が多い。

会津は新政府軍の攻撃中だった。会津が落城すると諸生党は水戸へ帰ることになり、田島、板室、佐良土から更に箆川を渡り、小川から馬頭に至る。ここで一部は小砂から左貫、大子を通り水戸へ向かった。一部は高部から石塚を過ぎて水戸へ。水戸に着いてからは弘道館の戦いで諸生党は敗れ南へ逃げる。霞ヶ浦を渡り、遂に八日市場の戦いにも敗れ、諸生党は壊滅する。

また「田中源蔵処刑の地」の碑が塙の道の駅にあるが、田中もやはり大子を通っている。田中勢は天狗党だが別行動を取り、助川の戦いに敗れ、小菅、東金砂、天下野、諸沢、西金、頃藤、大沢、山田、浅川から八溝山に至り遂に解散。

山を下りた田中は捕らえられ、塙代官所の手で河原で処刑された。(石井)



諸生党の進路

「市川勢の軌跡」市村真一より

## マンガン鉱床「依上鉱山」の紹介

大子町文化財保護審議委員 笠井勝美

### 一 マンガン鉱と依上鉱山

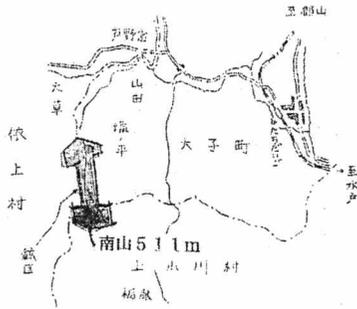
マンガンは多方面に用途を持つ金属である。製鉄の過程で硫化物を取り除くために鉄と混ぜることで非常に強い鋼鉄を作ることが出来る。そのため、特に戦時中は需要が増大した。また、マンガン電池に使われる他、ガラスや陶磁器に色を付けるために使われる。

平時であれば五割程度が鉄鋼業に利用されるが、太平洋戦争以前の資源の少ない日本においては、軍艦や軍事兵器を作るための資源として国内産のマンガンに関心が寄せられ、各地でマンガン鉱山が採掘された。八溝山地にも多くのマンガン鉱山が開かれた。近くでは大田原市須賀川横山の鹿島鉱山は、バラ輝石に富む鉱床で十年以上継続稼行され、総産出量は五〇〇〇トン（Mn三十三・三十六％）と言われている。

依上鉱山は、鷲子山塊の北部の南山（標高五一一m）から北方に尾根伝いに延びる、現在の依上地区大草・山田・栃原地区内に掘られたマンガン鉱山である。

昭和十八年から二十年と二十三年から二十六年の二回に渡り採掘された記録がある。鉱業権利者は、荒井源太郎氏で鉱区面積は三〇八、〇〇〇坪（登録番号二一五〇号）

「第一図」。掘り出された鉱石は、手押しトロと馬車で一Km程離れた山田塩の平地区入山まで運び、トラックに積み替え常陸大子駅に



第一図 依上鉱山位置図

運ばれた。

### 二 八溝山地の地質構造と鉱床及び鉱石について

八溝山地の地質構造は、東日本大震災等でも度々説明されている「プレートテクトニクス説」に合致したもので、中生代初め頃から海底に放散虫が大量に堆積し、海溝に沈み込んでチャート層になったもので、マンガン鉱床はその下底等にできる断層に貫入してできた火成鉱床と思われる。鉱区付近には砂岩・珪質頁岩・チャートが不規則に分布している。

鉱床は鉱区北部のチャート層に整合に胚胎する芋状マンガン鉱床で、一般走行はN八十度E、傾斜角は略垂直、走向延長十五m、傾斜面延長十m、厚さ二m（平均一m）程度を有している。現在は採掘跡だけが残っている。坑洞窟は下部より通洞坑・二号坑・一号坑があり通洞坑と二号坑の高度差は十二・五m、二号坑と一号坑の高度差は五・四mある。

マンガン鉱床は一号二号坑共にチャート層にのみ伴って存在し、チャート層の無い通洞坑には無い。現在は富鉱部は採り尽くされ確認はできないが、当時の鉱業権利者の記録によるとMn七十〜八十％の黒色二酸化鉱であったと書かれている。下に位置する通洞坑付近は千枚岩質粘板岩及び角閃玢岩と推測される岩石からなっている。鉱区南端付近にも延長五m、厚さ一・五mの亜金属光沢を示す鉱床がチャート層に伴ってあったと記録されている。

### 三 品位と生産量及び現況

現在、産出された鉱石を推測すると、二酸化マンガンと炭素と呼ばれるもので、品位はMn三十五％程度のものであると思われる。開山以来の鉱量累計は精鉱六五〇トン程度と推測される。採掘には当時七〜十三名の鉱員が採鉱と選鉱を行っていたようである。戦中は無選鉱のまま出荷され、戦後はMn三十八％程度

に手作業で選別し精鉱が出荷された。戦後、地元の人も従事していたと言われる。現在残る鉱山跡は無く、現況は直径二〜三m程の穴が廃坑跡とわかる程度である。

四 日本列島に見る八溝山地の地質年代とマンガン鉱床

日本列島の丹波・美濃・足尾・八溝等の山地は、太平洋のチャート層を挟む海底堆積物で出来た地層で構成されている。これらの山地はチャート層に伴ってマンガン鉱石も共有している。

東端に位置する八溝山地は中生代初期以降に堆積した地層で、以前に言われた「秩父古生層」とは呼ばず、「八溝山地の中生層」と言うのが適切な呼び方である。八溝山地の各地層中の産出化石から、最下部の珪質粘土岩は三疊紀初期、チャート層は三疊紀中期からジュラ紀初期、砂岩と頁岩はジュラ紀中・後期などの地質年代に海溝に沈んだことが明らかになっている。そのため、八溝山地は、チャート層が多い高取層が山地中央部を南北方向にのびているため、それに伴ってマンガン鉱山も分布している。

依上鉱山の北の第三系の基底に大きな左横ずれの断層があり、そのチャート連続が須賀川横山の鹿島鉱山となり、雲巖寺南から佐原間の左横ずれ断層で西方にずれ、そのチャート層が雲巖寺から伊王野に延びて南方鉱山や伊王野鉱山となる〔第二図〕。

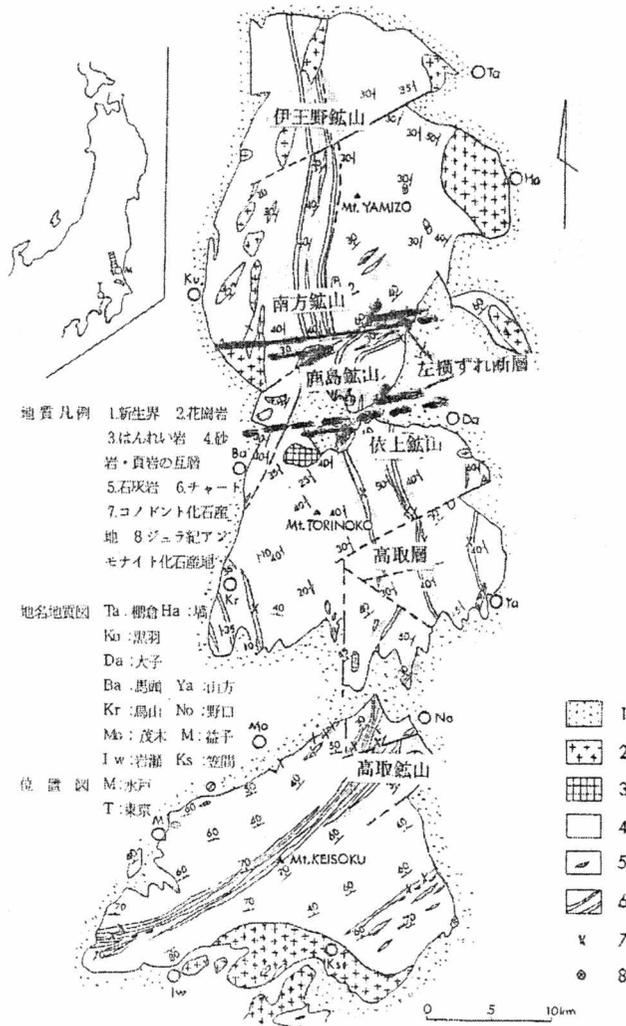
マンガン鉱床の成因は、海溝における塩基性火山活動に伴って生成したと

考えられる「火成鉱床説」が有力で、チャートの下部にある断層からチャート層を突き抜けず鉱床群を形成し、その後の断層活動により鉱床が不連続であった可能性がある。

注 チャートとは硬く緻密な微粒珪質堆積岩のことで、以前は珪岩とも呼ばれた。

参考文献

- 依上鉱山マンガン鉱床調査報告（一九五一年）梅本 悟 著
- 日本のマンガン鉱床補遺 前・後編（一九六七年）吉村 豊文 著
- 現代鉱床学の基礎（東京大学出版会）（一九七七年）立見 辰雄 編
- 八溝山地の地質構造（地調内留報告）（一九八一年）笠井 勝美 著



第二図 八溝山系地質図

## 願誓寺と徳川光圀

真宗 大谷派 醍醐山 願誓寺

第十三世住職 堀 川 真 尚

浄土真宗にとつて、常陸国は宗祖親鸞聖人ゆかりの地である。承元の法難（一二〇七年）により、京都から越後に流罪となつた親鸞聖人は、赦免後、京都には戻らずに関東にやつて来る。そして、稲田（笠間市）に草庵（西念寺）を結び、そこを拠点に念仏の教えを広める一方、主著『教行信証』を著すのである。

関東での約二十年にわたる布教を終え、京都に戻つたのは、親鸞聖人六十三歳の時と伝えられており、その頃、孫の如信上人は京都で生まれた。如信上人は、幼い時から青年時代にいたるまで親鸞聖人の近くで生活し、聖人の念仏の信念に生きる姿に接して育つた。文字通り親鸞聖人のお膝元で、聖人から念仏の教えを直に聴き取つていたのである。身近には、叔母の覚信尼（親鸞聖人の娘）や従兄弟の覚恵（覚信尼の子）がいた。

親鸞聖人が京都に戻つた後、関東の門徒集団の中には、聖人の教えに異議を唱えるものが現れる。そのため親鸞聖人は、子の善鸞、続いて成人した孫の如信を関東に送り込むことになる。しかし、関東では親鸞聖人の直弟子たちがそれぞれに大きな門徒集団を形成し、善鸞や如信は容易に受け入れられなかつたようである。そこで、如信上人は拠点が大綱（現在の福島県白河郡古殿町付近か？）に置き、大綱門徒と呼ばれる念仏集団を形成する。これが、現在大洗町にある願入寺の始まりである。

如信上人は、親鸞聖人が亡くなられた後、毎年聖人の命日（十一月二十八日）に合わせて大綱から京都に上つていった。その行き帰りに、大子町上金沢にある法龍寺に立ち寄つたのである。この地にはもともと太子堂があり、如信上人はそこを門弟の乗善坊に守

らせていた。正安元年（一二九九）、京都からの帰途、法龍寺に立ち寄られた如信上人は、しばらくして病床に臥し、翌正安二年（一三〇〇）一月四日にこの地で往生を遂げた。六十六歳であつた。

如信上人の遺骨は、法龍寺の境内に埋葬され、その跡には、如信上人十三回忌の日に、本願寺第三世覚如（覚恵の子）が公孫樹をお手植えしたとされる。如信上人お手植えと伝えられる榎の巨木とともに、樹齢七〇〇年の公孫樹の巨樹は、現在もうつそうと茂っている。

その後、大綱の願入寺は、戦乱を避けるように転々と場所を変え、第八世如慶のときに、常陸国那珂郡大根田村（現在の常陸大宮市下小瀬）に移る。

その頃、願誓寺開基の祐利上人は、大根田の願入寺に参詣したおり、第九世如賢の説教を聴き、ついに信者となり、西金村川野辺家を出家し、得度して弟子となつたという。

元禄元年（一六八八）、祐利上人は、小生瀬村水根に一寺を建立して開基した。寺名は、師である如賢により願誓寺と命名された。

願誓寺の創建には、徳川光圀が深く関与し、如信上人御廟所の上金沢法龍寺に近いことから、元禄三年（一六九〇）、今の地に引寺を命じられ、三つ葉葵の御紋の使用を許された。

徳川光圀は、たびたび法龍寺を訪れたらしく、現在も法龍寺に伝わる「如信上人座像」は、座像背面の銘文から、延宝二年（一六七四）の徳川光圀による新堂宇建立とともに寄進されたことが分かる。

願誓寺所蔵の『文政十年（一八二七）銘、当寺開基等之行状

井御造管等の次第筆記写書』によると、元禄七年（一六九四）七月二十日、徳川光圀は、上金沢の法龍寺にある如信上人の墓所へ詣でたおりに、願誓寺を仲宿として立ち寄り、石に次の和歌を揮毫したとある。

観月碑

よに志ばしかるい  
ほりにつきをみて虫  
起ゝ阿かす秋の心は

世にしばしかる庵に月を見て  
虫きゝ明かす秋の心は

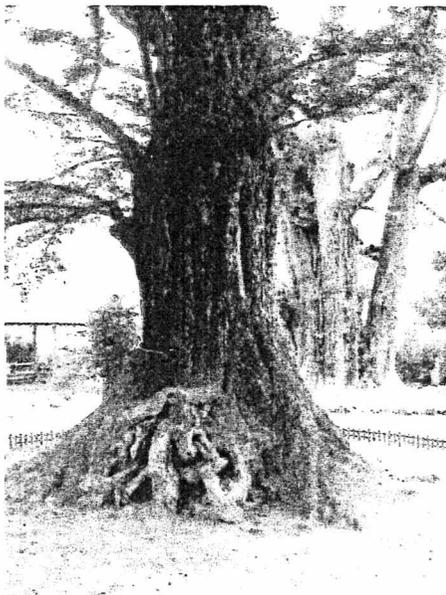
義公観月碑は、願誓寺本堂前庭の百日紅の老樹の根元に建てていたが、すでに風化し苔むしてしまっていたところを平成二十二年、本堂の新築落慶に合わせて修復し、現在は本堂前の梅の老樹のもとに場所を移して建っている。



義公の観月碑



願誓寺山門



如信上人御手植の榎の木  
背後の公孫樹（銀杏）は、  
覚如の御手植え



法龍寺の如信上人座像

『生きた証・私の抑留記』(五)

全国強制抑留者協会茨城県支部長

須藤 富之助

○帰還―ナホトカ港に向かつて

昭和二十三年十月一日、待望の帰還乗車命令が下りた。その日の夕刻頃だった。涙に明け暮れたウクライナの地をあとにしてシベリア鉄道に向かった。ナホトカまでの一か月の旅である。

モスクワの首都を過ぎ、だんだんシベリアに向かつて進んでいくのであるが、出発から一〇日以上過ぎた頃からソ連兵の監視が緩和され、精神的に気が楽になった。もうひとつ助かった事は食料の補給ができたことである。毎日配給される食事で我慢できないことはなかったが、多年に亘って栄養失調的な体調であったから、身体がもつともつと食事を要求するのである。

我々はどうしようもなく、夜間駅に停車中の貨車によじ登り、六〇トンの貨車に積み込んで製糖工場へ送っていく砂糖大根を雑糞に入れて盗って来るのである。命がけであったが、この砂糖大根の補給によってかなり満腹感を味わうことができた。

シベリア鉄道は、一路ナホトカへ向かつて走り続けた。二十数日が過ぎたころ、本部車両に乗車しているソ連兵の上役からの連絡であるといつて、「ソ同盟をたたえる歌を歌わないと内地帰還は許されない」という連絡があった。それは、マルクスレーニン主義の主張に共鳴し、賛同するということであった。多少歌える者が本部から各貨車にきて教えるのであるが、歌詞も分からず、調子も合わず閉口した。十月三十日午後十時ごろ終着駅ナホトカに着いた。

○引き揚げ船「高砂丸」で舞鶴港へ

夜明けと同時に行動が開始された。日本の病院船、赤十字マークの付いた一万トンの「高砂丸」がソ連抑留者の引揚げを行っていたのである。船中に入ると、白衣の天使が「長い間、御苦勞様でした」と、頭を垂れて迎えてくれた。このときの感激

は、忘れえぬ内地帰還の一場面となっている。

船内は誰もが「興奮の坩堝」という様相となっていた。夜中であっても寝ている者はほとんどいなかった。栄養失調気味で衰弱して臥している者もいたが、誰もが内地の事を思い、語り合い、賑わっていたのである。

十一月一日零時、月が変わった。朝の四時か五時ごろであったらうか。誰かが「内地が見える、内地が見えてきた」と待望の叫んだ歓喜の声で、我先に階段を上りはじめた。甲板は黒山の人だかりである。かすかにぼんやりと、日本列島の一部が浮かんで見えてきた。よくもここまでたどり着いたものだ、よくも生きて生き抜いてこられたと思うと、次から次へと涙がほとぼしってくるのをどうする事もできなかった。船中から見えたのは、日本海に京都舞鶴港であった。

昭和二十三年十一月一日。舞鶴港に上陸。引揚援護局関係の方々が迎えてくれた。上陸後は、先ず消毒から始まった。粉末のDDTによる消毒は、装具、身体の順に行われ、宿舍が割り当てられた。ところが一度に三隻の引揚船の入港であったため、諸般の手續きが遅れ一週間の滞在となった。

○一路故郷大子に向かう

昭和二十三年十一月七日。早朝、臨時列車が舞鶴駅に準備を整えて待機していた。関係者や婦人会の人たちの歓送を受けて、車中の人となった。汽車は一路郷里に向かった。上野駅を経て水戸駅に着いた時は、薄暗くなっていた。水郡線に乗り換え、乗車まもなくして叔母の心温まるおほぎの差し入れがあった。重箱に入っていたものを全部頂戴したので、同席の叔父達は驚いていた。夜の七時三十分か、八時ころ大子駅に着いた。国夫叔父、谷田部武雄さん、岩佐さん達が駅頭で迎えてくれた。出迎えにでている人にお礼を述べ、用意されていた車で自宅へ向かった。家は召集で家を出たときと変わった様子はなかったが、ただ、父親の姿がなかった。

【資料紹介】「開基帳」にみる町内の真言宗

寛文三年(一六六三)、水戸藩は、領内の社寺を調査して「開基帳」を作成した。その記載内容は、山号・寺号、その石高、除地(年貢免除地)、百姓地(年貢賦課地)、本寺、開基(開山)者とその年代、開基から寛文三年までの年数、且那数などである。今回は、真言宗について、町内の寺院の様子を紹介しよう。

・相川村(三か寺)

養命院 (町付村慈雲寺門徒) 慶長二年より六五年 且那八一人  
地福院 (町付村慈雲寺門徒) 慶長四年より六三年

浄音坊 (下金沢村性徳寺門徒) 寛永元年より四〇年

・下金沢村(三か寺)

宝光院鷲巢山性徳寺 能化(慈雲寺末寺) 高七石九斗八升九合  
延徳二年より一七四年 末寺五ヶ寺門徒一八ヶ寺且那二九七人

常膳院 (下金沢村性徳寺門徒) 天正一二年より八〇年

堯甚坊 (下金沢村性徳寺門徒) 寛永九年より三二年

・大生瀬村(七か寺)

普賢院熊野山 千福寺 (大野村実相院末寺) 文龜二年より一六二年 且那八〇人

福蔵院薬師山道照寺(池田村宝乘院末寺) 天文二年より一三一年

還俗 延寿院(実相院門徒) 永禄五年より一〇二一年 且那三三人

地蔵院 平僧 (大野村実相院門徒) 天正七年より八五年

宝積院 (大野村実相院門徒) 天正六年より八六年 且那二八人

還俗 金剛院 (大野村実相院門徒) 寛永一一年より三〇年

還俗 弥勒院 (大野村実相院門徒) 寛永一六年より二五年

・冥加村(五か寺)

相果 常蓮院(昇覚院門徒) 弘治元年より一〇九年 且那二五人

還俗 常福院(性徳寺門徒) 元龜元年より九四年 且那一〇人

還俗 文殊院(慈雲寺門徒) 弘治二年より一〇八年 且那二八人

安養院 (上郷村性海寺門徒) 天正二年より九二年 且那二〇人  
無住養善院(中郷村大雲寺門徒) 慶長一七年より五二年 且那八人

・比藤村(一〇か寺)

東浄寺 田舎能化 (水戸一乘院末寺) 長禄元年より二〇八年  
門徒二ヶ寺 且那七五人

教王院宝珠山宝光寺(馬頭村地蔵院末寺) 永禄元年より一〇六年

門徒二ヶ寺 且那五〇人

欠落 千手院 (比藤村宝光寺門徒) 元龜二年より九二年

教泉院 (比藤村宝光寺門徒) 天正三年より八九年

頼光院 (年数村鏡徳寺門徒) 永禄二年より一〇五年

還俗 徳泉院 (追原留村南照院門徒) 文禄三年より七〇年

還俗 秀養院 (馬頭村地蔵院門徒) 文禄元年より七二年

還俗 正学院 (水戸一乘院門徒) 天文三年より一三〇年

東善院花宝山西光寺(町付村慈雲寺末寺) 文治元年より四七九年

東性院 (比藤村東浄寺門徒) 慶長二年より六七年

・南田気村(一か寺)

還俗 慈眼院松林山観音寺(慈雲寺末寺) 元龜元年より九四年

且那六九人

・埴村(一か寺)

千手院中務山 観音寺 (大山田村惣徳寺末寺) 高四石九斗七升  
文龜三年より一六四年 門徒二ヶ寺 且那九六人

・田野草村(二か寺)

還俗 円蔵寺(慈雲寺末寺) 天正三年より七九年 且那四二人

・北田気村(一か寺)

常光寺 (鏡徳寺末寺) 永禄一二年より一〇二年 且那一五四人

・大野村(七か寺)

実相院如意山 宝珠寺 能化 (友部村宝鷲院末寺) 高一石五

斗三合 天文一二年より一二二年 門徒一四ヶ寺 且那六四人

還俗 成就院(実相院門徒) 天文一四年より一四四年 且那一四人

欠落 成泉院(実相院門徒) 慶長四年より六五年 且那一八人

宝金院 (実相院門徒) 慶長六年より六三年 且那二〇人

最成院 (実相院門徒) 天正一〇年より八〇年 且那二〇人

不動院 (実相院門徒) 高四石四斗九升七合 天文二〇年より一三〇年 旦那六二人  
浄光院 (実相院門徒) 慶長七年より六二年 旦那一四人  
・初原村(二か寺)

宝光院中嶋山 東照寺 (大山田村鼻覚院末寺) 天文一七年より一六六年 門徒一ヶ寺 旦那三八一人

宝泉坊 (初原村東照寺脇坊) 寛永一〇年より三〇年

・中郷村(四か寺)

清瀧院解脱山 大雲寺 能化 (町付村慈雲寺末寺) 高六石六斗六升 永正一七年より一四四年 門徒九ヶ寺 旦那三八一人

西光寺 能化(慈雲寺末寺)享祿四年より一三〇年旦那三九〇人

無住 勸行院清瀧山 満初寺 (中郷村大雲寺門徒) 高五石一斗九升八合 永正一七年より一四四年

正善院 (中郷村大雲寺門徒) 文祿元年より七二年

・小生瀬村(三か寺)

東光院宝蔵山 宝泉寺 (上年数村鏡徳寺末寺) 永正元年より一六〇年 旦那三〇七人

龍泉院月居山 東秀寺 (袋田村満福寺末寺) 享祿元年より一三六年 旦那五二一人

還俗 宝徳院 (袋田村満福寺末寺) 天正元年より九一年

・高柴村(四か寺)

円鏡院宝珠山 金性寺 (性徳寺末寺) 天文二一年より一一二年 旦那五〇八人

善徳院 (実相院門徒) 天正元年より九一年 旦那一五〇人

覚成院 (実相院門徒) 文祿元年より七二年

還俗 行福院 (袋田村万福寺門徒) 慶長二年より六七年

・槇野地村(五か寺)

玄順坊 (性徳寺門徒) 天文一三年より一二〇年 旦那九六人

還俗 宝徳院(性徳寺門徒) 天正元年より九一年 旦那三〇人

相果 行音坊(性徳寺門徒) 天文二年より一三一年旦那一〇三人

還俗 長意坊(慈雲寺門徒) 元龜二年より九三年 旦那一人  
還俗 文忠坊(町付村慈雲寺末寺) 正保二年より九年

・河山村(一か寺)

宝蔵院 慶長一一年より五八年 旦那二八六人

・沢亦村(一か寺)

還俗 地蔵院(大雲寺門徒) 文祿元年より七二年 旦那四七人

・三ヶ草村(一か寺)

龍蔵院 (普門寺末寺) 天正一三年より七九年 旦那六三人

・山田村(二か寺)

円鏡院山崎山 長樂寺 (大山田村鼻覚院末寺) 永正九年より一五二年 旦那五一八人

安養院 (池田村宝乘院門徒) 文明七年より一八九年旦那三六人

・左貫村(五か寺)

持宝院浄土山 西福寺 能化(もと大山田村鼻覚寺末寺) 文明九年より一八六年 門徒五ヶ寺 旦那二一五人

相果 正泉院 (佐貫村西福寺門徒) 天正一三年より七九年

還俗 常照院 (佐貫村西福寺門徒) 慶長四年より六五年

宝泉院 (佐貫村西福寺門徒) 天正一〇年より八二年

常福院 (大山田村鼻覚院門徒) 永祿二年より一五〇年

・下宮村(六か寺)

還俗 菅田山真浄院 普門寺(性徳寺末寺) 高五石七斗一升六合 永正一〇年より一五二年 末寺門徒七ヶ寺 旦那三〇〇人

理性院 (普門寺門徒) 永正六年より一四六年 旦那二二〇人

無住教正院 普門寺門徒 天文一九年より一一五年旦那一二〇人

亡所 福泉院 (普門寺門徒) 享祿二年より一三六年旦那三四人

還俗 光憧院 (下野宮村普門寺門徒) 文明八年より一九一年 旦那二〇八人

還俗 養観坊(普門寺門徒) 天文四年より一三〇年旦那一一一人

・大沢村(二か寺)

無住 正法院金玉山大聖寺(種姓院末寺) 永祿四年より一〇三年

吉成院 (上年数村鏡徳寺末寺) 永禄六年より一〇一年  
 ・浅河村(七か寺)  
 自性院宝珠山 法性寺(町付村慈雲寺末寺)大永五年より一三九年 門徒一ヶ寺 且那二〇〇人  
 宝積院鹿嶋山 西光寺(性徳寺末寺) 天文一六年より一七七年  
 宝勝院月鏡山 安樂寺 (下金沢村性徳寺末寺) 天文二年より一三一年 門徒二ヶ寺 且那一三五人  
 還俗宝善院(浅川村安樂寺門徒)元和八年より四二年且那二一人  
 福性坊(性徳寺門徒) 文禄二年より七一年 且那五〇人  
 林成院(浅川村法性寺門徒)天正元年より九一年 且那一三七人  
 円寿院事順宗坊(慈雲寺門徒)永禄三年より一〇四年且那二一人  
 ・中谷田村(一か寺)  
 吉城院先長山 永光寺(慈雲寺末寺) 慶長一二年より五五年  
 ・池田村(二か寺)  
 宝乘院小沢山 千手寺(友部村法鷲院末寺)嘉吉二年より二二二年 且那四六三人  
 還俗 慈宝院 (下金沢村性徳寺門徒) 永禄元年より一〇五年  
 ・栃原村(一か寺)  
 還俗 円蔵院(勝覚院門徒)天正九年より八三年 且那一五八人  
 ・袋田村(一か寺)  
 宝珠院 四度山 満福寺 能化 (上年数村鏡徳寺門徒) 文龜三年より一六一年 末寺一ヶ寺 門徒三ヶ寺 下住山伏三人 且那七四九人  
 還俗 正蔵院 (袋田村万福寺門徒) 天正七年より八五年  
 ・芦倉村(五か寺)  
 普賢院明照山 南辺寺 (下金沢村性徳寺末寺) 弘治三年より一〇七年 門徒一ヶ寺 且那八〇人  
 宝珠院(惣徳寺門徒) 延徳二年より一七三年 且那一〇人  
 還俗 延命院(惣徳寺門徒)文明一五年より一八〇年且那一〇人  
 還俗 福乘院 (下金沢村性徳寺門徒) 文禄元年より七二年

亡所 賢識坊 (芦野倉村南辺寺門徒)天正一三年より七九年  
 ・西金村(一か寺)  
 浄徳院(諸沢村慈眼寺門徒)大永六年より一三八年且那三〇二人  
 勝善院 (上宮河内村定源寺門徒) 開基知り申さず  
 ・下津原村(一か寺)  
 医王寺松宮山宝光院(鏡徳末寺)天正四年より八八年且那四〇人  
 ・上郷村(五か寺)  
 円満院小中山性海寺 能化 (町付村慈雲寺末寺)高一二石二斗八升九合 永正六年より一五五年 門徒五ヶ寺 且那二六七人  
 西福院 (性海寺門徒) 永禄九年より九八年 且那一七四人  
 無住 東覚院(性海寺門徒)天正五年より八七年 且那一五五人  
 密蔵院 (性海寺門徒) 天正一五年より七七年 且那二六〇人  
 宗雲坊 (性海寺末寺) 慶長四年より六五年 且那八八人  
 ・町付村(五か寺)  
 千手院金剛山 慈雲寺 (醍醐報恩院末寺)高一〇石六斗 文明五年より一九一年 末寺二ヶ寺門徒七六ヶ寺 且那一二三人  
 養福院 (町付村慈雲寺脇寺) 慶長元年より六八年 且那四人  
 成就院 (町付村慈雲寺門徒) 慶長五年より六四年 且那二人  
 成照院 (町付村慈雲寺門徒) 慶長一八年より五一年  
 無住 弥勒院 (町付村慈雲寺門徒) 慶長二年より六七年  
 ・大子村(五か寺)  
 泉福院福貴山 西蓮寺 (水戸一乘院末寺)永禄九年より九八年  
 潰 宝珠院近町山正覚寺(東清寺末寺)天文一四年より一〇〇年  
 鏡泉院鏡光山大高寺(大中村龍真院末寺)永禄元年より一〇六年  
 無住 宝善院 (大中村龍真院末寺) 天正一五年より七七年  
 還俗 吉成院 (上年数村鏡徳寺末寺)永禄六年より一〇一年  
 真言宗のお寺は、大子町内に一一一か寺あり、そのうち四三か寺が還俗(俗人にもどる)や潰、相果、無住、亡所と整理されだが、これは人々に大きな衝撃を与えたことであろう。(野内)

## 勤皇志士堀江芳之介の記念碑

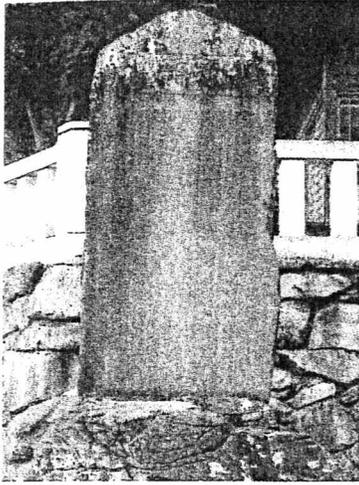
栃木県と茨城県の境である関ノ田和峠の麓に位置する花室神社境内（大子町大字左貫本郷）に、東禅寺事件にかかわった勤皇志士堀江芳之介の記念碑が建立されている。

芳之介は、文化七年（一八一〇）二月、父農業堀江善三郎の第三子として常陸国久慈郡左貫村本郷（現大子町）に生まれた。母は冥加村から嫁いでいる。芳之介は幼名を駒藏といい、後に芳之介と改めた。別名克之介、雅号は無名と号した。

芳之介は、幼少時から聡明にして勉学を好み、同村内の大平山西福寺住職や同村上野台の儒医吉成正伯のもとで学を修めた。また、芳之介は常に兵書を読み、剣を学んだという。

芳之介は二十六歳前後の頃、馬頭町小砂（現栃木県那珂川町）へ婿養子に行つたが、専ら書籍を読みふけり、稼業には専念しなかつたため、月を経ずして婚家を出て生家にもどつてゐる。

芳之介が生まれ育つた時代は、外国船が日本の周辺に來航し、開国か、攘夷かをめぐり国内が騒然となつて來た時代である。生家にもどつた芳之介は、水戸に出て、藤田東湖、武田耕雲齋、その他名士の門に入入りし、知遇を得て次第に尊皇攘夷の思想を篤くもつようになつた。



「堀江芳之助記念碑」

弘化元年（一八四四）五月藩主斉昭が幕府から「隠居・謹慎」の処分を受けた。斉昭は、直ちに長男義篤に藩主の座を譲り、謹慎生活に入った。その主な理由は、

「他の大名の模範となるべき御三家でありながら、おごりが度を超え、幕府の御制度に触れることもしばしばあった」というのが表向きの理由であつた。しかし、幕府の本意は斉昭の「寺院の破却」、「日光東照宮からの僧侶の追放」などの強引な仏教弾圧に対する謹慎・処分であつたといわれている。このような斉昭への処分に対して、領内では処罰解除を求め、士民の雪冤運動が各地で起こり、奉行所に嘆願書を提出した。さらに神職も神職優位を明確にした斉昭を称え、寺社奉行所に訴え出た。農民や他藩の武士も参加をし、雪冤運動は激化していった。こうした人たちは「義民」と称された。芳之介は、幕府の斉昭への不当な処分・謹慎に対して「義民の首となり雪冤に尽力をした」ので郷士に列せられた。

安政四年（一八五七）四月堀江芳之介は、同志蓮田東三、信太義正と米国公使ハリスを路上にて刺殺しようとしたが果たせず江戸伝馬町の獄に投ぜられた。その時、同獄舎に長州藩士吉田松陰がいた。松下陰の『留魂録』に「東口揚屋二居ル水戸ノ郷士堀江克之助余未タ一面ナシト雖モ真ニ知己ナリ」とあり、松陰と知己となつた。その後、芳之介は赦され、吉田松陰を畏敬するところとなり、水戸で培われた信念を一層強めることができたのである。

万延元年（一八六〇）三月桜田門外の変後の八月、徳川斉昭の死去は水戸藩をいっそう混乱におとし入れ、水戸浪士の尊皇攘夷運動を一層活発化させた。

井伊大老の死後、幕政は安藤対馬守筆頭に四人の老中によつて行われていたが、外交方針は井伊直弼の方針と変わりはなかつた。そのため、攘夷を主張する尊攘派の意志に反するため、外人を対象とする物騒な殺傷事件が頻発していた。

外国の公使らは、殺傷事件が頻発するのは、幕府に外人保護の誠意がないからと申し立てをした。幕府は江戸や横浜を中心に十分に警戒し、取り締まりをしていたが、攘夷の浪士

たちを取りおさえることができなかった。

万延元年（一八六〇）十二月には、プロシヤの使節オイレ  
ブルグの通商条約締結の通訳にあたったアメリカ公使の通弁官  
ヒュースケンが暗殺された。さらに、イギリスの公使オールコ  
ックが香港に行った帰路長崎へ上陸し、陸路を経由し、二十六  
日には神奈川に到着したのを耳にしたから、二十八日にはイギ  
リス公使館に充てられていた港区下高輪の東禅寺に入ることが  
分かると、同志の前木新八郎、有賀半彌、池田為吉、石井金四  
郎、榊鉞三郎、中村貞介、千葉昌平、森半蔵、古川主馬之介、  
渡辺剛蔵、山崎信之介、小堀寅吉、堀江芳之介、黒沢五朗、高  
畑房次郎、中村乙次郎、安金之介、小池庄平、木村幸之助らは  
品川にて会談し、襲撃の打ち合わせを行い、同日夜半東禅寺正  
門より切り込んだ。その時の襲撃の様子を『水戸藩史料下編卷  
三』は、次のように記している。

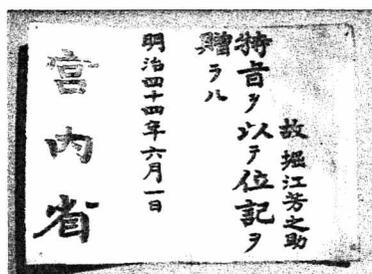
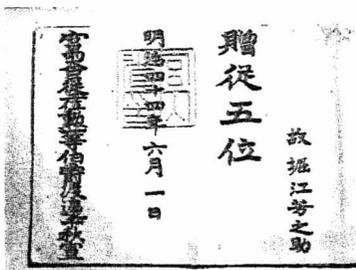
「是の夜東禅寺の英国公使館を襲撃す是より先き幕府は浪士の  
暴行を真り各国公使を擁護すること頗る厳にして東禅寺は西  
尾、郡山の二藩に警衛を命じ且つ旗下の土を選抜して番兵に充  
て用意甚だ密なり然れども壯士は敢えて之を意とせず 咄嗟正  
門より闖入して直ちに館内に迫り亂所突撃外人二名に傷つけ將  
に公使の室に入らんとする時に室内暗黒にして障壁相触れ刀を  
奮ふに便ならず公使オールコック周章僅に身を脱して逃れ去る  
追撃及ばず宿衛の兵防戦尤も力む壯士竟に志を得ず…略…」

この時、書記官オリファントと長崎領事モリソンの二名が傷  
ついたが、オールコックには逃げられてしまった。境内では浪  
士と警備兵の乱闘となり、浪士たちは警備兵のために殺される  
者、自刃する者、幕府の役人によって捕縛処刑される者等が、  
相次いだ。この事件は「東禅寺事件」と称し、その顛末は、負  
傷者の賠償金一萬ドルと公使館の建設を幕府が負担をして事件  
は一件落着をした。

堀江芳之介の事件後の動静であるが、『茨城勤皇志士略伝』  
や『明治維新人名辞典』、堀江家（現当主市原五男）に所蔵さ

れている「堀江芳之介君事蹟考」などによると、事件後芳之  
介は、巧みに京都に走って逃げたが、たまたま豊田小太郎殺  
害の嫌疑を受けて捕らえられ、江戸伝馬町より水戸の赤沼に  
移された。維新の際の国家多事のために、何の取り調べもな  
く獄舎に置かれ、その後、特赦により許されたが、明治四年  
（一八七一）二月十五日獄舎で病没した。享年六十二歳であ  
った。亡骸は水戸市酒門の定善寺に埋葬された。

死後四十年を経た明治四十四年（一九一一）六月一日、宮  
内大臣より従五位が贈られた。大正元年十一月十五日、郷里  
の有志らにより、芳之介の「従五位榮典」を祝し、佐原尋常  
高等小学校に於いて茨城県知事坂仲輔、久慈郡長羽田久遠を  
はじめ、大子警察分署長警部檜山萬吉、大子農学校長木田才  
次郎、大子地方教員総代大子尋常高等小学校校長野内熊蔵、近  
隣町村代表らの臨席のもとに祭典が行われた。同日芳之介の  
偉業を不朽に伝えるために花室神社境内に「贈従五位堀江芳  
之助君記念碑」が建設された。



「従五位」  
「贈」された  
（現当主市原五男氏所蔵）

注：芳之介の「介」であるが、市原氏所蔵「堀江芳之介君事蹟考」では「介」、吉田松陰『留魂録』や「従五位榮典賞状」  
「贈従五位堀江芳之助君記念碑」では「助」と記されているのでそのまま掲載した。（小澤）

昭和の初め頃の農家の行事 一一 一月の行事

一、山入り（一月六日） お正月は農家では何も仕事はしないでゆつくり休む。

仕事始めはこの山入りである。この日農家の人は鉈か鋸と、お正月の松飾りの紙垂（しで）やお供え物を持って近くの山へ行く。木を切って一年間の山の安全を祈願する。紙垂はその近くの茅か灌木に結びつける。将来大きくなる木にはつけない。その木が大きくなってから、知らずにその木を切ると怪我をすると言ひ伝えがあるからだ。供え物は餅、豆、こんぶなどを紙に包んで上げる。これはお正月の神様に上げたものである。山から帰り、山で切つて来た木でお茶を沸かして神様に上げる。

二、七草（一月七日）旧暦の一月は新暦の二月か三月に当たるので、そろそろ山菜が採れる。この日は七草がゆとか七草雑炊などと言われている。春の七草「芹、なずな、ごぎょう、はこべ、ほとけのざ、すずな、すずしろ、これぞななくさ」と言う歌があるくらいで日本全国にある習慣だが、この内のいくつかを入れて誤魔化しているのが多いようだ。

三、鉦入り（一月十一日）農の始めとも言う。鉦を持って田か畑に行く。松飾りを差し、米・麦・豆・魚など様々なお供え物を上げ、三鉦さくりをして豊作を祈る。山入や鉦入りをしないうちは仕事をしてはいけないと言う。農家ではこの日にはようもじり（は



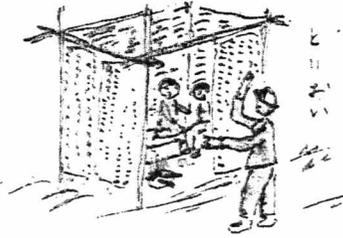
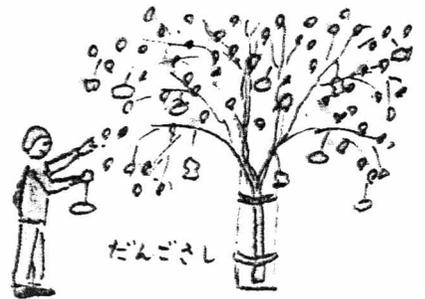
ようぶちとも言う）をやる。

四、団子挿し（一月十四日）十三日の晩に松飾りをはずし、代わりにみずの木を切ってきて、米の粉で団子を作り枝の先に挿して大黒柱や臼などに縛り付ける。お竈様には小さい木で三十六個上げる。天神様は二十五個で梅の枝に決まっている。お竈様は女の神様で、年は三十六歳いつも年はとらないそうだ。

紅白の団子の外に、その頃は最中の皮のような物で俵、魚、大黒様、小判など様々な形をした物を売りにきた。それに薄い紙を貼り付け、木の枝に付ける。これは綺麗な色が付いているのでにぎやかになる。何しろ子供の背の二・三倍もある木だから団子の数も大変だ。

この団子は「二十日の風に当てるな」と言われており、十九日まで外してしまふ。また、この日は鏡崩しでもあり、いよいよお正月の行事も終わりになる。

五、鳥追（一月十四日）この辺の鳥追いは雀を追い回したりはしない。道路の脇に板や筵などで小屋を造り、真ん中に囲炉裏があり酒を沸かして待っている。大人が通りかかると「よつていきな」とか何とか言つて酒を飲ませ小遣いを貰う。子供の遊びで、これが鳥追いだ。（石井）



## 新聞記事にみる満州移民の断片(九)

### ―第九次冷家店大子町開拓団の軌跡―

大子町開拓団の様子を伝える記事(昭和十六年七月三日付「いはらき」新聞夕刊)の続きをみよう。

通信 警備電話架設中にして団本部に郵政弁事所(郵便局)あり、一般郵便事務の他小包、貯金、為替事務の取扱ひをなす

医療機関 本年中病院建築予定で目下本部内に診療所を設け治療の完璧を期し衛生指導員として医師一名、看護婦一名あり、尚県立病院、陸軍衛戍病院利用の特典を有す  
娯楽設備 現在見るべきものなきも団員は常に相撲、剣道を娯楽として体力の錬成を怠らず夜は蓄音器等を楽しみつゝあり

全住民 分村の外郭合計三百卅戸一千百五十六名の満洲人あり、思想概して良好、団の事業に協力してゐる

雇用賃金 当地方の満人雇用賃金は最高三円五十銭、最低一円五十銭程度にして季節に依り若干の高低あり、一時に二百名位の雇入れは附近においても容易である

建築家屋 本団本年度現在個人家屋は六十四戸、厩舎四、附属農舎六十四、幹部宿舍二、倉庫二、精穀場一、鍛工蹄鉄場一、小学校一(他神社建立、病院建築中)

団員の訓練 班制を組織し各班毎に班長を置き又各班毎に優劣を競争せしむる外時々学科、講演、武道教練、警備、防護訓練をなしつゝあり

満人との協和 満人殊に原住民との協和は日滿融和の最大眼目たる關係から全員一致茲に意を須ひ、満人患者に対しては無料施療をなし、冠婚葬祭に心からなる真情を披瀝

表示し、又常に児童を通じ協和誘導に努力するため彼等は非常に喜び団の事業に協力してゐる

団法運営 常に法の徹底を図り、監督官庁と密接なる連絡を取り団長を中心として団員の強固なる精神的団結を図り円満なる運営を期してゐる

営農方法 地理的並に自然的条件を活用せる有畜農業経営を目標とし、改良農具利用の自作自営家族的勤労精神を以て経営の基礎とし隣保協助精神の高度發揚につとめてゐる

引用を中断し、若干補足しておきたい。

先遣隊員の入殖から約一年半、開拓地における生産と生活の骨格が少しずつ整備されてきたことが読みとれるが、「建築家屋」の点では、三ヶ月後の昭和十六年十月が一つの節目であった。次のような指摘がある。「待望の本部部落が完成しました。施設内容は本部事務所一棟、診療所一棟、倉庫一棟、団長宿舍一棟、共同浴場一棟、一棟二戸建十一棟、井戸一か所、水量豊富。以上建設完了。…本部事務所は玄関を入って突き当りが事務用品倉庫、右に事務室、ヘーチ力暖房で仕切った。奥が団長室、南窓際は事務室と通しの広間になって居る。全団員が集合しての会議室も兼用し利用価値を備えた事務室であります」(『開拓の記録』と。本部事務所はいわば役場的な機能を果たす中心施設でもあるので、その完成の意味するところは大きかったと思われる。また、独立した建物として診療所が完成したことも重要である。すでに十五年一月に、開拓団医師として羽鳥正邦が着任していたが、診察は「旧本部部落の一室」で行われていた。団員の健康を維持する拠点が出来たというだけでなく、「医療を通じて原住民との交流を深める」(前掲書)という意味で、まさに「満人との協和」の拠点にもなったのである。(齋藤)

## 大子町の遺跡について

大子町には、縄文時代から近世にかけての遺跡が一五六か所存在する。特に、縄文時代と奈良・平安時代の遺跡が多く確認されている。久慈川とその支流の広がりにより、水利に恵まれていることから、古代より人々が生活を営む場として絶好の舞台となってきた。

旧石器時代の遺跡は、確認されていないが、昭和五十八年に仲山古墳群（矢田）の調査をしている時、この古墳を造るために削った関東ローム層から剥片が出土しているので、旧石器時代にすでに人が生活していたことが分かる。

縄文時代の遺跡は、八十二か所ある。時期ごとに遺跡分布を見てみると、早期から前期の遺跡は久慈川本流に沿った丘陵上に分布するものが多く、中期から後期の遺跡は久慈川支流の押川流域に多く見られる。

弥生時代の遺跡は、五か所と極めて少ない。これは、茨城県の特長でもある。猪鼻峠遺跡（高柴）で、壺形土器が出土している。

古墳時代の遺跡は、四十二か所ある。上岡古墳群（上岡。町指定史跡）は、二基の古墳からなる。また、仲山古墳群は、六基の古墳からなり、内一基は前方後円墳である。仲山古墳からの出土遺物は、直刀、刀子、鉄製鎌である（町指定考古資料）。奈良・平安時代の遺跡は、八十一か所ある。塙平A遺跡（塙）からは、竪穴住居跡・軒と内黒の杯・高台付杯が出土している。昨年、国道一一八号道路改築事業に伴い、（財）茨城県教育財団が橋元遺跡（南田気）を発掘調査している。

中世の遺跡は、三十一か所ある。大子地方には、長い間、白河結城氏や岩城氏、佐竹氏の勢力の狭間で攻防が繰り返された

ため多くの城館跡が残っている。その多くは、山頂を切り崩した山城や舌状台地に堀を設けるなど、山や川の自然条件を生かしたものである。

近世の遺跡は、大子郷校跡（大子）など三か所ある。

これらは、先人が残してくれた貴重な財産である。町民の共有財産として将来に引き継いでいけるよう、保護・活用に取り組んでいきたい。

## 編集後記

「ほない歴史通信」は、お陰様をもちまして、今回で創刊から六十号となりました。読者の皆様に、またご多忙にもかかわらず玉稿をお寄せくださった執筆者の方々にお礼を申し上げます。

今後とも年四回ふるさとの歴史情報を発信してまいりますので、ご支援のほどよろしく願います。また、忌憚なきご意見・ご批判、ご投稿をお寄せいただければ幸いです。

（皆川）

## 編集人

斎藤 典生（茨城大学人文学部）

野内 正美（元 教員）

石井喜志夫（元 教員）

小澤 圀彦（元 教員）

皆川 敦史（大子町教育委員会）

## 編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室気付

久慈郡大子町池田二六六九番地

T 3 1 9 - 3 5 5 1 ☎ 0 2 9 5 ( 7 2 ) 2 6 2 7